

御挨拶

住職 堤 俊翁

新年明けましておめでとうございます。

昨年は本当に大変なことが起こった年でした。

景気は一向によくならず、職を失った人がたくさんいて、自然環境も大きくかわろうとしているようにも見受けられます。

こんな時代にはいままでの価値観も通用しないのかもしれませんが。

でも、幸せを求める人々の心は変わらないと思います。物が豊かなこの時代もっとも大切なことはどんなに周りがかわろうとも決して変わらない自分を見つけることです。

本当の自分を知り、本当の自分に根ざした目標を定めて生きることが大切です。

血を引いたご先祖の供養をすることから本当の御自身を見つけてください。そのお手伝いができることを目指していきたいと思います。

浄土宗なんでも相談室

Q 主人のお葬式の時、突然の事に準備もままならず、すべて葬儀社に任せてしまったことが、心残りではありません。葬儀の心得を教えてください。

AAA 肉親の死は、厳粛な事実です。大きな嘆きと悲しみの中、ただ呆然とし、何をしてよいやら、戸惑うばかりでしょう。しかし、やるせない心を奮い立たせ、事を進めていくほかはありません。不測の折の心得をいくつか述べておきましょう。つ。仏教において、死の直前、すなわち臨終は、仏の国へ旅立つ門出として、大事に考えられています。極楽往生を願い、阿弥陀仏の来迎を信じ、心からのお念仏を称えてあげることが肝要です。この時お仏壇を開いて、お灯明を上げてください。そして、いよいよ肉体的な死が訪れた時、真っ先にすることは、お念仏の中に、末期の水を含ませることでしょう。脱脂綿をつけた箸や、新しい筆に水をひたし、亡くなった人の唇を湿らしてあげてください。これは、故人と血のつながりの濃い人から順に行います。ご遺体の扱いは、臉を軽く撫でるようにして目を指で伏せ、口を閉じさせ、両手を胸のところで合掌させて、後で数珠をかけます。また湯灌（ゆかん）といって、アルコール等で遺体を拭き清め、鼻、耳、肛門等から汚物が漏れないよう綿を詰めます。その時見苦しくない程度に、顔や髪を整えます。看護婦さんや葬儀社の人なら、上手に手伝ってくれるでしょう。次に死装束と呼ばれる着物を左前に合わせて着せます。この死装束には、三角頭巾、頭陀袋、手甲、脚絆、自足袋、草履、杖などがあります。遺体は納棺までは北枕にし、仏間か座敷に安置して、顔を白い布で覆います。また遺体に掛けられた布団の上に、故人が髪を剃って仏門に入ったしるしに何か刃物をのせておきます。枕机には、燭台、香炉、花瓶、水、仏前飯、枕だんごを供えます。これらのことは、葬儀社に頼めば、段取りよくしてくれますが、できれば近親の方々もすすんで手を添えてあげたいものです。弔問を受ける態勢を整え、葬儀社と相談するのと並行して、菩提寺への連絡はなるべく早くしてください。ともかく、家族の人が、香をたき、一心に念仏を申す心構えがなければなりません。何よりも大切なことは、亡き人への思いやりです。

一皿精進

Vegetarian Cooking

ひじきおから

西生院住職夫人 濱田登志子さん



材 料

ひじき、、、 20g
おから、、、 15g
薄揚げ、、、 1枚
人参、、、、 1/本
干し椎茸、、 2個
干し椎茸のもどし汁
、、、 1カップ
砂糖、、、、 大さじ 4杯
薄口醤油、、 大さじ 3杯
みりん、、、 小さじ 3杯
油、、、、、、 適宜
ごま油、、、 少々
酢、、、、、、 小さじ 1/杯

作り方

- 1、ひじきはもどして水洗いし、よく水を切る。薄揚げ、人参、椎茸は千切りにする。
- 2、鍋に油を熱しひじきを炒め、薄揚げ、人参、椎茸を入れてよく炒めたあと、椎茸のもどし汁を加えて煮る。
- 3、2に砂糖、薄口醤油、みりんの順に入れ弱火で煮る。
- 4、別の鍋に油を熱し、おからを弱火で炒めておく。
- 5、3に4を入れ、弱火で炒める。最後にごま油を入れ、酢少量を加える。



一、空（内在と超在と遍満と） （こもり候）

空を信仰的に表現してみよう。表現と方法に、法としての不変恒常の配置を仏菩薩になぞらえるか、これは表はれ来らざるの図、そして働きとして表象され来っている物事を仏菩薩の配置として曼陀羅（図式）とする。これは表はれ来るの図、この二つの形式より表はれ来らざるを超在せる一神（生き通して在る内在自性）表はれ来るを变在せる汎神（生き死にしてゆく限られた寿）として、この世を超在一神的汎神の世界として受け止めてみると、信仰に応じて数々の図式化（曼陀羅）が出来ることとなる。見つめる心の深さが内奥を具象出来るところに曼陀羅を見い出さねば、この空間の眞実は表現出来ず如来の深い慈悲心は現象の顕現を示す以外の方便はないということになる。我等は覆われた鎧を脱ぐことが出来るのであろうか、不思議なことに人は生まれ死すという生命の中に死ぬか生きるかの瀬戸際をさまよい不可思議な体験をして生の側に戻る時、見えないはずの死の側を垣間見てしまう。この様なことから現実側からは不思議と思えることが明かされることになる。生命の垣根を揺る行をして向う側をのぞく時、見ただけの人か、この世まで憑かれた人かというところに何か大切なことがある様に思える。古事記の黄泉の

国を訪い見てはならないものを見て追いかけて逃れるところに肉体は死しても死んでいない魂魄があつた世に生き続けている、この世の者に係る出来事として書かれている。明らかにあの世とこの世の同居にして成り立っていることが当り前の様に語られることである。昨今は科学的という事で垣根を頑丈にして見えないようにして死ねば終りという事で片付けている時代ではなからうか。人間が信仰と宗教を表に出さない時代にしたら、これは「いのちの否定」即ち人類の未来を断つ出来事になるであろう。全ては見えない世界の現われであるということ否定する（判らない）時代になれば、それを暗黒と呼び、何事も生じて来ない滅ということである。如来の慈悲は非滅に滅を現じての如来如去の道理と法に裏付けられてのことであるが故に、現象世界の法に随う営々たる事象が生起するのである。ここより一切衆生悉有仏性・山川草木大地皆成仏の境界なる由縁である。私が人間としてこの世にある限り数多くの人と出会いがあり各人が時代の人である限り私の心との隔たりは避けられない。お互い様のことではあるが、然し乍ら私の心が年と共に人との出会いに依って成長するのであれば、年を経る事と人に出会う事の大切さは欠かせない事である。そういう意味では良き師に恵まれなければ、よき人に導かれねば、この世に在る間、生まれて来た甲斐のない日暮しとなつてしまう。何もむつかしい事ではない。日々の暮しの中に信仰と宗教を中心に据え置いてこそ、人間社会の姿は裏付けられた願いに順じてこそ確かなものになるのであるが、世界の宗教とて、いまだして宗教も

成長の過程であり、宗教に係わる人間も又信仰の厚きか、薄きかに依つて余りにもたよりないのではなからうか。まだまだ遠い道程が見えていないのである。

一、試案の程

般若心経に（心経）

摩訶般若波羅密多心経

觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無漏死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得無所得故菩提薩（土+垂）依般若波羅密多故心無（四+圭）礙無（四+圭）礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅密多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等咒能除一切苦眞實不虛故說般若波羅密多咒即說咒曰

揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶

大意を取りて

般若波羅密多の前に行深と説かれ、これは觀自在菩薩が深く行じられた時、深く行を行じ続ける。行を行行……と積み重ねて行かれると五蘊皆空と断じ切る智力が、行力が自分自身の内より起るが故に、その行力に依つて一切の苦厄の想いが断じ尽るか

らと受け止めるならば行とは何を指すのであろうか。釈迦牟尼佛は觀自在菩薩の行を知っているのである。行に依つて内なる想いが五蘊皆空と断じられ、断じる智力が一切の苦厄を度（消滅）させているのだ。舍利子よ五蘊とは色受想行識の五つを空と、諸法空なるが故に不二の法門・生滅・垢淨・増減と二辺を離れ五蘊の六根・六識・六境を無と受け止め無明を始とする十二因縁・四諦の苦集滅道、さらに無智・無得・無所得と現実の否定と肯定を正しく見窮めるが故に菩提薩（土+垂）は般若波羅密多に依るが故に心無（四+圭）礙となりて恐怖と顛倒無想が遠離されるが故に涅槃の心境が芽生えてくる三世の諸佛は般若波羅密多に依つたが故に阿耨多羅三藐三菩提を得ることが出来たのである。故に知んぬべし、般若波羅密多は大神咒であり、是大明咒であり、は無上咒であり、は無等等咒なるが故に能除一切苦であると眞實不虛故説の咒こそ般若波羅密多である。般若波羅密多の咒を咒ながら人生智慧と勇氣を持って自己の直感とひらめきを大事に頑張るべきである。あと戻りのない前に進む道のみがある。般若波羅密多と咒することが觀自在菩薩の深く行じ給えるところなりかと、ここに二つの超訳という形を示してみる。